

JOURNAL
OF
INDIAN AND BUDDHIST STUDIES

Vol. XXIII No. 2 March 1975
[46]

PROCEEDINGS (2)
OF THE TWENTY-FIVE CONGRESS
HELD AT
TŌYŌ UNIVERSITY

Edited by
JAPANESE ASSOCIATION OF
INDIAN AND BUDDHIST STUDIES

The Japanese Acceptance of Indian Thought: Eschatology (III)	
Kōkai Tanaka, Graduated of Ryūkoku University.....	944
Concerning Buddhist Texts and Chinese Bibliographical Studies	
Ryūo Naitō, Graduated of Risshō University	948
Hōnen Shōnin in the period when he was seeking truth	
Jikai Fujiyoshi, Prof. of Hanazono University	952
Review on <i>The Buddhist Tantras; Light on Indo-Tibetan Esotericism</i>	
(Samuel Weiser, New York, 1973) xiii+247 p. by Alex Wayman	
Shinjō Kawasaki, Lecturer of Taishō University	956
Pt. Hazariprasad Dwivedi in Shantiniketan	
Toshio Tanaka, Asst. Prof. of Tōkyō University of	
Foreign Studies	972
On the Bharata Legend in <i>Viṣṇu Purāṇa</i>	
Shinryū Okuda, Graduate Student of Kyūshū University.....	977
A study of the Māradharṣaṇaparivarta in the <i>Lalitavistara</i>	
Kōichi Hokazono, Assistant of Kagoshima Economic College.....	982
The Abhāva-theory of Jayanta (I)	
Yoshinori Shima, Graduated of Ryūkoku University	985
Lāmā yoginī and Her Transposition in the Saṃvara-maṇḍala	
Shinichi Tsuda, Lecturer of Eastern Institute.....	992
The significance of the Buddha's Miracles in Śrāvastī and in Saṅkāśya	
Motoharu Uno, Graduated of Ryūkoku University	997
Concerning the Relationship between the 'ālayavijñāna' and	
'paoratantra-svabhāva'	
Nobuaki Kamiya, Lecturer of Gifu Women's Junior College.....	1001
The Meaning of the term 'anuśaya' with explanation	
Kenyō Mitomo, Assistant of Risshō University	1007
Equivalence in Dharmakīrti's 'Pratyakṣa'	
Takashi Iwata, Graduate Student of Waseda University	1012
On the <i>Vaiśeṣika-sūtra</i> , II-ii-19	
Eshō Mikogami, Asst. Prof. of Ryūkoku University	1021
The Navya-nyāya Concept of VĀKYA	
Mutsushi Nagao, Lecturer of Kumamoto Junior Music College...	1026
Mūlācāra Chap. 2 and Āura-paccakkhāṇa	

Kiyoaki Okuda, Asst. Prof. of Shitennōji Women's College	1032
Concerning Dārikapa's <i>Mahāguhyatattvopadeśa</i>	
Motohiro Yoritomi, Lecturer of Shuchiin University	1036
Some Notes on the term 'Sādhuśabda'	
Kunio Harikai, Assistant of Kyūshū University	1045
A Study of Agnicayana(I) — <i>Ukha</i> and <i>Mahāvīra</i> —	
Yasuke Ikari, Assistant of Kyōto University	1057
A Manuscript of the <i>Mahāyānottaratantraśāstropadeśa</i> , a Sanskrit	
Commentary on the <i>Ratnagotravibhāga</i>	
Jikidō Takasaki, Asst. Prof. of Ōsaka University	1065
Über die Methode der Zitierung der Mantras im Rhāradvāja-Śrautasūtra	
Shingo Eino, Graduate Student of Kyōto University	1073
<i>Nirodhasamāpatti</i> —Its Historical Meaning in the <i>Vijñaptimātrata</i>	
System—	
Noriaki Hakamaya, Assistant of Komazawa University.....	1084
On the <i>Besson-yōki</i> , a Work of Buddhist Iconography	
Shunshō Manabe, Curator of Kanazawa Bunko	1090
PUDGALA-NAIRĀTMYA—A Study of the Dhu ma la ḥjug paḥi	
rgya cher bśad pa by Tsoñ kha pa—	
Ichijō Ogawa, Lecturer of Ōtani University.....	1096
A Reference to Maga in the Tibetan Translation of the Tarkajvālā	
Shinjō Kawasaki, Lecturer of Taishō University.....	1103
A Study of Pratiyogin	
Atushi Uno, Prof. of Hiroshima University	1110
On the Problem of 'Gedatsu' (mokṣa) and the <i>Buddha-carita</i>	
Eshō Yamaguchi, prof. of Ōsaka University.....	1116

(51) Über die Methode der Zitierung der *Mantras* im *Bhāradvāja* (S. Eino)

bahnte, durch. Tatsächlich wird eine Handlung erst nach dem Hersagen eines *Mantra* vollzogen,⁹⁾ aber je älter ein *Śrautasūtra* ist, desto häufiger nimmt es dagegen die Reihenfolge Handlungsvorschrift - *Mantra* an. In der Tat kommt diese Reihenfolge in 4 *Śrautasūtras* der *Taittirīya*-Schule in folgendem Verhältnis vor: im *Baudhāyana* zu 90%; im *Bhāradvāja* zu 75%; im *Āpastamba* zu nicht mehr als 10%; im *Hiranyakeśin* zu fast 0%. Daß im *Āpastamba-Śrautasūtra*, das eins der am festesten gestalteten und am besten zusammengeordneten *Śrautasūtra* ist, plötzlich das Verhältnis weniger wird, erklärt sich dadurch, daß der *Sūtraverfasser* des *Āpastamba*, obwohl oder weil er die Absicht der *Sūtraverfassung* in Betracht zieht, der wirklichen Reihenfolge der Handlungen den Vorrang gibt, in der Absicht, dadurch das *Śrautasūtra* sich vom *Brāhmaṇa* unterscheiden zu lassen. Was das *Bhāradvāja-Śrautasūtra* betrifft, das sonst auch von den *Śrautasūtras* der jüngeren *Taittirīya*-schulen im engsten Zusammenhang mit dem *Baudhāyana* steht, können wir sagen, daß es seinen der Zwischenstufe angehörenden Charakter auch in der Konstruktion des *Sūtra* selbst aufweist.

* Das *Bhāradvāja-Śrautasūtra*, das hier benutzt wird, ist *The Śrauta, Paitrmedhika and Pariśeṣa Sūtras of Bhāradvāja. Critically edited and translated* (von C. G. Kashikar). Part I: Text, Part II: Translation. Poona 1964.

9) 1, 2, 2-3: *mantrāntaiḥ karmādān saṁnipātayet|| 2|| atha yatra hrasvo mantrāḥ syād dirghaṁ karma karmādau mantrāṁ jayet|| 3||*

宝性論の註釈 Mahāyānottaratantra-sāstropadeśa の写本

高 崎 直 道

§ 1. 写本の由来

かつて、ラーフラ・サーンクリトヤーヤナ (Rāhulasāṁkṛtyāyana) 師はチベットに入つて、各地の僧院で多数の仏典のサンスクリット写本を発見し、その主なるものを写真に収め、後にそのリストを Patna Museum 内の Bihar & Orissa Research Society の雑誌に公表した。(1936, JBORS, xxi) かれは其中で、Mahāyānottaratantra, すなわち『宝性論』(Ratnagotravibhāga, 以下、略号 RGV) の写本として三種を挙げている。その写本写真にもとづいて RGV の校訂を果したジョンストン教授 (E. H. Johnston) は、上記三種のうち、二種は間違いなく RGV の写本であつたが、第三のもの (ラーフラによれば 4 葉とあるが、Patna Museum 所蔵の写真では 3 葉) は、検証の結果、RGV そのものの断片ではなく、独立のテキストで、奥書によれば

Mahāyānottaratantropadeśaḥ kṛtiś Śrī Satyajñāna-pādānām/

と見える旨を、RGV 校訂本 (*The Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra*, Patna, 1950) の序文で報告した*。(ibid., Forward, p. vi 序文の執筆は 1941) Johnston はこの Satyajñāna なる人の著作について、内容の検討を加えることなく死去し (1942), その後、この作品は誰にも採り上げられずに放置された。

* かれは、この写本の書体が RGV の写本二種よりも古く、多分 8 世紀か、それ以前のものであらうと言い、下註で Gilgit 本の Bhaiṣajyaguruvaidūryaprabhārāsūtra の写本 A に極めて近いことを指摘している。

一方、ラーフラ師とは別に、ローマのツッチ教授 (G. Tucci) も同じテキストの写真 (ただ一葉の表裏のみ) を、恐らく Ngor (Nor) 寺で撮影したらしく、コピーを所蔵していた。同教授の見るところでは、件のテキストは一葉で完結しているものの如く、また、作者の名は Sajjana と読めるとのことであつた。これはブーナのゴーカレー教授 (V. V. Gokhale) から、筆者がかつて同地滞在中 (1956) 聞いたことである。

筆者はさきに RGV を Johnston の校訂本によつて読み、その研究をした際、このテキストの校訂を志し、Patna Museum および Tucci 教授の両方から、その許可を得た。Patna Museum から写真のコピーを入手し、Tucci 教授所蔵の写真は Gokhale 教授を通じて借用した。両者対比の結果、Tucci 教授所蔵の写真は Patna Museum の写真版の第三葉に相当することが判明したが、写真は極めて判読しがたく、筆者の能力の及ぶ限りではないと感ぜられたので、そのまま研究を断念し、Tucci 教授所蔵の写真版は、便を求めて Gokhale 教授まで返却した。ただその際、後日の研究にと思つてその写真版を複写しておいた。その後、Tucci 教授所蔵の写真版は、Gokhale 教授の手許で紛失したため、現在のところ、筆者の作つた複写のネガだけが、資料である。(因みに、Patna 版の写真は如何に鍊達の士でも、それだけで解読を試みるのは凡そ不可能と思われる。)

昨1973年、筆者は久しぶりにインドに渡る機会を得たのを幸いに、しばらくプーナに滞在して、Gokhale 教授の指導をうけながら、件の写真版の解読を試みた。解読はまだ完全には出来ておらず、校訂本の公表にはなお時日を要すると思われるが、筆者は RGV の英訳に際し、本テキストの校訂の意志表示をしたことではあるし (J. Takasaki, *A Study on the Ratnagotravibhāga*, Roma, 1966, p. 7, n. 7) ここに中間報告を行つて、長年の怠慢に対し、幾分の責めをふさぎたいと思う。

なお、解読に際し、Poona の Āyurveda 大学講師、Dr. S. N. Bhavsar 氏の助力を得たことを併せ記して、感謝の意を表わす次第である。

§ 2. 表題と作者

写本の奥書は、

//Mahāyānottaratantraśāstropadeśaḥ kṛtiś śrīmatsajjanapādānām//

とある。従つて、本テキストは題目を Mahāyānottaratantraśāstropadeśa, すなわち『大乘究竟論のウパデーシャ (提要)』と言い (以下、UT-upadeśa と略称)、その作者は、Johnston のいう Satyajñāna ではなく、Tucci の説のとおり Sajjana である。この Sajjana は RGV のチベット訳者のひとりたる、Kashmir の学僧 (paṇḍita) Sajjana* とおそらく同一人であろうと思われるが、まだ確証はない。

* 1059-1109 A. D. cf. George N. Rörich, *The Blue Annals*, Part I, Calcutta, 1949, pp. 325-6.

§ 3. 写本の書体と年代

写本の書体は、いわゆる Śāradā Script である。Śāradā Script は北インドに行われた Brāhmi 文字 (梵字) のうち、北西インドで用いられた系統に属し、10世紀以降、Kashmir で使用された文字である。比較的古型を存していると言われ、法隆寺貝葉などと元は同一の系統*で、事実書体はよく似ている。従つて、書体から言えば、Johnston も言うように、8世紀もしくはそれ以前の作品である可能性もないわけではないが、Kashmir で書写されたとすれば、その年代が10世紀以降であることをさまたげるものではなく、むしろ、このテキストが Kashmir において、前記 RGV のチベット訳者と同一人の手によつて出来たことの蓋然性、したがつて、写本の成立も11世紀後半以降である蓋然性は極めて高いと言わなければならない。

* A. H. Dani, *Indian Palaeography*, Oxford, 1962, p. 113.

写本の材質は多分、貝葉 (Palm-leaf) であるが、長さ等は不詳。損傷は両端を除いて比較的少く、文字の刻印は、書込みの部分 (後述) を除けば、かなり強く太いように見うけられる。

表記上の特色を二、三挙げると、

- 1) 母音のうち、子音に附帯する 'e' と 'o' には二種が併用されている。すなわち、文字の左肩、および、左右の両肩に点をうつて、それぞれ 'e' 'o' を表わす Śāradā 本来の (したがつて古型の) 表記法と、他は今日用いられる Devanāgarī と同様の表記法である。後者はガンジス中流域からカシミールに伝えられたものか。
- 2) インド写本によく見かけるところの、'r' のあとに来る子音の重複 (e. g. dharmma < dharma) は見うけないが、'sattva' は 'satva' と記される。
- 3) 仏典の写本によく見かける文末の 'm' の代りに anusvāra (ṁ) にする例は (ここでは詩頌の行末の例だが)、ほとんど見られない。
- 4) Visarga (h) は、詩頌の行末では Devanāgarī と同じ表記法であるが、文中の場合、'p' 'ph' の前 (すなわち upadhmāniya) および 'k' 'kh' の前 (すなわち jihvāmūliya) では、それぞれに独特の字形で、次に来る字の上ののり形をとる。なお、無声音 's', 't' 等の前では 's', 'ś' の前では 'ś' が使われている。(何れもタテに字を重ねる)
- 5) その他、'ma' 'śa' 'sa' の三字の区別が読みとりにくく、また、'rtha' などは三種の書体が混用されている。

§ 4. テキストの構成と体裁

本テキストは、Tucci 教授の推定どおり、一葉で完結している。(Patna Collection の三葉のうち、前二葉は、本テキストと行数が異なるので、明らかに別の作品である。そこで、その二葉が如何なるテキストに所属するかを改めて解読する必要が生じた。)

本テキストは、その主要部分(基本部分)は表に 5 行、裏に 4 行あるが、その行間、もしくは上下の欄外に、小さな字で種々の書き込みがあつて、一見、全体の行数が倍以上になっている。解読の結果、それらの書き込みは、本文に対する註記と知られた。同一作者のものかどうかは解らないが、同一の筆者の書であることは、書体から推定するところ、確実である。これを本文作者自身の覚え書とみなすことも可能であるが、想像される状況としては、この写本の筆者は本文の作者 Sajjana の弟子で、師の作品をコピーした上で、師から親しく解説を聞きながら、われわれが書物の行間に書き込みするように、その聞いたところをメモしたということであろうか。

主要部分、すなわち、UT-upadeśa のテキスト本文は、37の韻文より成り、若干の補いの句が、韻文の間に散見する。詩頌に用いられた metre は anuṣṭubh 調が大部分で、他は āryā 調である。

anuṣṭubh: vv. 1-8, (9), 11, 14~37; āryā (12+18 mātrās): vv. 12, 13.

(v. 9 と v. 10 は前後や中間に散文の説明を含んでおり、v. 10 は韻律未確認。)

註記は、v. 33 に至るまでの大ていの詩頌にあるが、長短は不揃いである。それらの註記は原則として、当該詩頌上の行間に、その詩頌のはじまるところの真上から書きはじめられるが、時に上下の欄外に記されている場合もある。最も長い註記は、奥書(裏側の四行目の末尾にある)の真下に、三行にわたつて書かれているものである。

それらの註記の内容は種々で、当該詩頌の内容の要点を挙げたものなどもあるが、しばしば、RGV の詩頌(本頌、註釈偈を問わず)の引用がみられる。これによつて、このテキストの所収の書、Mahāyānottaratantraśāstra が、RGV に他ならないことが確認された。

§ 5. UT-upadeśa の内容梗概

本文たる 37 頌の内容は、要約すると次のとおりである。

A. 三宝 (vv. 1~4)

三宝は『宝性論』の「宝」の意味するところであるが、Upadeśa の著者によれば、三宝は三種の道(三乗)に対応する(v. 1)が、究極的にはただ一つの帰依処

のみであり、発心とは、それを目ざすものである。(v. 2)

B. 七種金剛句 (vv. 5-15)

『宝性論』の主題たる七種金剛句(vajrapadāni sapta, RGV. I, 1), すなわち、仏、法、僧、性(dhātu, 界=仏性、如来蔵)、菩提、功德、業について、はじめに、前三すなわち三宝と、「性」と、菩提等の後三とに三分する(vv. 5-7)。これは「性」すなわち如来蔵が成就すべき果たる三宝と、その因たる如来蔵自体(すなわち宝性=三宝性=三宝建立の因)と、三宝成就に当つての「縁」たるものという三分を意味する。次いで、「因」たる「性」(dhātu)の同義語、如来蔵(tathāgatagarbha)と種姓(gotra)の意味を論じ(vv. 8-10)、つづいて、それと三宝、および法身と不可分な菩提・仏功德・仏業との関係を、因たる性(如来蔵)が、果たる法身(dharmakāya)に至る「道」(mārga)「行道」(patha)として把握し(vv. 11-13)、あわせて、仏三身と法身との関係(v. 14)、三種種姓(真如、本性住、開発性)と三種法身(=仏三身?)との対応を説く。(v. 15)

C. 如来蔵の十義 (vv. 16-19)

如来蔵の十義、すなわち、自性(svabhāva)、因(hetu)、果(phala)、業(karman)、相応(yoga)、起行(pravṛtti)、位差別(avasthāprabheda)、遍一切処(sarvatra), 不變(avikāra)、無差別(asambheda) (RGV. I. v. 29) は、RGV, I, vv. 30~94にわたつて述べられる如来蔵論の内容のインデックスであるが、ここでは、十義の継起の次第(anusandhi, RGV. I. 29)の意義を、因より果に至る行道の次第とみている。

D. 如来蔵と煩惱 (vv. 20-22)

E. 三種自性と如来蔵の信 (vv. 23-28)

『宝性論』は十義につづいて、『如来蔵經』の九喻を引いて、煩惱との関係、本質論としての法身、真如、如来性(tathāgatagotra)の三種自性(trividha svabhāva)の説を展開し、最後に、その難解性と信の重要性を説く(漢訳でいう「無量煩惱所纏品第六」)が、これは、それに見合う部分である。三種自性については、その一々については論ぜず、九喻との関係で、修行論的にうけとめている。

最後の v. 28 は、『宝性論』が同じく『如来蔵經』を引用して、「一切衆生が如来蔵である」ということが、如来の出世・不出世にかかわらぬ法爾の道理(dharmatā-yukti)であると主張するところを受けていると思われる。

F. 果としての法身 (vv. 29-34)

以上 C-E に示された如来蔵の修習(bhāvanā)から生ずる果を、無垢(amala=

- yasyāḥ/
tribhī rāgādyanuśayāḥparyavasthānamekataḥ//[20//]
drg-heyā ekato dvābhyām bhāvanāheyasamjñitā/
asuddhaśuddhārtha□mā□□kāṅkṣayabhāginah//[21//
B1 anupāmeti dṛṣṭānte □yaḥpratividhiyate/
nirvedhakatvādrāgāderanvikṣaudhatyabādhanī//[22//]
layasyaivāpravṛttyartham dharmakāyādibhedavān/
svabhāvastrividho bhāvyaḥkṣālo vyākṛtatvataḥ//[23//]
svabhāvādibhāvanā parikarmyātmabhāvanā/
asyāpavādādṛṣṭāntaiḥparikarmātmabhāvanā// 24//
antaraślokaḥ// 0//
□e□yi sūḍito vyaktum śāstre cintādikātkramah/
svabhāvādivyavadināpi sve'rtham yadvibhaktavān// 25//
tā(tan)tre piṇḍārthanirdeśaḥprākcintāvataraśrayaḥ/
svabhā(B2)vāderatovyaktibhāryatvasyānuvaktikā//[26//]
piṇḍārthasyaiva nirdeśo yaḥpāścādupamākramāt/
heyam prāpya svabhāvāderbhāvanāyāssa(hpra?)śamsati// 27//
adhikāryaśeṣo'smindṛṣṭiśuddhikaro mataḥ[/]
yuktyā prasādanādāptabādho dvārāśca tatsthitih// 28//
evaṅca bhāvanāyogānniriyāte samudāgamaḥ[/]
amalādāvasampūrṇassa ca prāgeva varṇitaḥ// 29//
paripūrṇastu bodhyādisstu cāsuddhadvā(i)bhūmigaḥ/
B3 mahābodhirguṇākhyānādāropāpāhato dvidhā//[30//]
śuddhirvyogassvānyārtho vṛttiśceti guṇakramaḥ/
mārgadvayasya jñānasya viśvedābhyām mohātmanām//[31//]
lokagocarabhāvena samāropaścaturvidhaḥ[/]
prāptyā tenāśrayatvanityatvācintyatveṣu dayohanam//[32//]
pāramārthikamāy(?)iā kāyadvayasamāśr(śri)tāḥ[/]
viśamyogaguṇā jñānabhāve vaipākikā guṇāḥ// 33//
yāvadyathāvadākāram guṇebhyaḥkarma tatpunaḥ[/]
yathāsamkhyena podādanavadhā(B4)maprakīrtitam// 34//
iyatā śailanirdeśaśāstre 'sminnavāśamsayā/
prarocanāvaśeṣeṇa śāstrarakṣā ca pṛṣṭhataḥ//[35//]
dṛṣṭvānuśamsām vartante prayoktāro nirantaram/
rakṣayādīnavajñāśca nivartante kumānataḥ//[36//]
svakriyānkevalāmatra noddīśya pariṇāmanam/
kevalam śubharakṣāyai pareṣāmapī darśitam// 37//
// mahāyānottaratantraśāstropadeśaḥkṛtiśrīmatasajjanapādānām//

(昭和48年度文部省科学研究費一般研究Dによる成果の一部)

Ukhā と Mahāvira

井 狩 彌 介

Agnicayana 祭¹⁾の主要部分を形成する、煉瓦による五層の壮大な Agni 祭壇の築造に先立つことほぼ一年、この大祭の予備祭式が開始される。

この一連の予備祭に於ては、Ukhā と名付けられる特殊な土器が中心的な役割を果たしている。この Ukhā は、その中で火 (=Agni) が燃やされ、上述の Agni 祭壇築造までの一年間、祭主がこれを保ちつつ Viṣṇukrama, Vātsapra の儀式を繰り返し行つたのち、火壇築造にあたつて、人の頭蓋骨をその上に載せて第一層の基底中心部に安置される。

全 Agnicayana 祭式の冒頭は、Savitṛ 神に供物を捧げ、以下執行する祭の成功への鼓舞を祈願した後、この Ukhā なる土器の作製に係る諸行作をもつて開始せられる²⁾。土器作成に要する諸材料の獲得・塑成・焼成・燻成等の過程は、祭式手続をとつてかなり詳細に互に記述される³⁾。

さて、この一連の祭式手続を祭儀綱要書は Ukhāsam̐bharaṇa (以下、Us. と略

- 1) Agnicayana 祭式の記述: A. Weber, Indische Studien XIII, 1873, pp. 217-292, J. Eggeling, The Śatapatha Brāhmaṇa Pt. IV (SBE, Vol. XLIII) Introduction, 1897, A. Hillebrandt, Ritualliteratur (GIAP. III, 2), 1897, pp. 161-165, A. B. Keith, The Religion and Philosophy of the Veda and Upanishads Pt. 2 (HOS. Vol. 32), 1925, pp. 354-356 など。但し、何れも白 Yajurveda 系統の伝承に基く記述であり、黒 Yajurveda 伝承に基く記述、研究は未だなされていない。後者の伝承は、前者と祭式の細部、祭式間の順序に差異を示す。なお、その他、研究には、H. Oldenberg, Göttingen Nachrichten 1917, pp. 1-16, K. Rönnow, Le Monde Orientale 1929, pp. 113-173, J. Gonda, Die Religionen Indiens I, 1960, p. 191, seq. などがある。
- 2) 黒 YV による。白 YV では、Agnipaśu を冒頭に置き、次いで Ukhāsam̐bharaṇa に移る。
- 3) Baudh (āyana) Ś (rauta) S (ūtra) X. 1-8, Āp (astamba) ŚS XVI. 1. 1-6. 1, Mān (ava) ŚS VI. 1. 1-1. 2, 22, H (iranyakeśin) ŚS XI. 1. 1-1. 67, Vār (āha) ŚS II. 1. 1-1. 48, Vai (khānasa) ŚS XXIX. 1-2, K (ātyāyana) ŚS XVI. 2. 1-4. 26 なお Vādh (ūla) ŚS 47, 48, 56, 57 (数字は Caland の断片番号), T (aittiriya) S (amhitā) V. 1. 1-1. 7, M (aitrāyaṇīya) S (amhitā) III, 1, 1-1, 8, K (āthaka) S (amhitā) XIX. 1-1. 7, Kap (iṣṭhalakathā) S (amhitā) XXIX, 7-XXX, 5, Śat (apatha) Br (āhmaṇa) VI. 3-5.

Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 Unported

You are free:



to **Share** — to copy, distribute and transmit the work



to **Remix** — to adapt the work

Under the following conditions:



Attribution — You must attribute the work in the manner specified by the author or licensor (but not in any way that suggests that they endorse you or your use of the work).



Noncommercial — You may not use this work for commercial purposes.



Share Alike — If you alter, transform, or build upon this work, you may distribute the resulting work only under the same or similar license to this one.

With the understanding that:

Waiver — Any of the above conditions can be **waived** if you get permission from the copyright holder.

Public Domain — Where the work or any of its elements is in the **public domain** under applicable law, that status is in no way affected by the license.

Other Rights — In no way are any of the following rights affected by the license:

- Your fair dealing or **fair use** rights, or other applicable copyright exceptions and limitations;
- The author's **moral** rights;
- Rights other persons may have either in the work itself or in how the work is used, such as **publicity** or privacy rights.

Notice — For any reuse or distribution, you must make clear to others the license terms of this work. The best way to do this is with a link to this web page.